

蘭嶼～黒潮に洗われるタオ族の島



片倉 佳史（台湾在住作家）

蘭嶼は太平洋に浮かぶ孤島である。群青色に輝く海原に囲まれ、歴史的に長らく外界と途絶した環境にあった。今も、他地域では見られない独自の文化が育まれている。今回はこの蘭嶼について紹介してみたい。

太平洋に浮かぶ海洋民族の島

蘭嶼（ランユイ・らんしょ）は台湾島の東南に位置する島である。台東から約 82 キロ離れた沖合にあり、面積は 48.4 平方キロと小さいが、北に位置する緑島に比べると、3 倍程度の広さである。地勢は険しく、海岸線のほぼ全てが岩場となっており、沿岸部を除くと、島全体が山岳のような状態である。

この島には平野らしきものはほとんどない。最高地点は紅頭山で標高 552 メートル。海岸線は屹立した岩石に阻まれ、荒涼とした風景が延々と続く。一方で草原などもあり、地勢は思いのほか変化に富んでいる。

この島の景観を特色付けているのは気候である。気候区分によれば、台湾島の最南端に位置する墾丁国家公園周辺と、この蘭嶼だけが熱帯性気候に属する。降雨は多く、年間を通じて安定した雨量がある。年間降水量は 3000 ミリにおよび、降雨日数は 200 日を超える。そのため、場所を問わず、森林が発達しているが、いずれも熱帯性植物であり、蘭嶼だけに見られる固有種の類も少ない。また、短いながらも溪流があり、その谷間を利用してタロイモなどが栽培されている。

蘭嶼の年間平均気温は 22.6 度となっているが、昼夜の温度差は大きい。また、島の景観に大きな影響を与えているものとして、「風」の存在も挙げておかなければならない。この島には季節を問わず、海から風が吹きつける。風速 10 メートル以



蘭嶼の浜辺。住民の多くは農業と漁業に従事している。漁業に関しては毎年 4 月前後に行なわれるトビウオ漁が広く知られている。

上の風が吹く日は 250 日を数え、常に海風が吹いている状況となっている。

この風のために、一般的な農業は発達せず、住居も後に述べるような独特な様式となった。また、マラリアを媒介する蚊が棲息せず、あらゆる疫病が蔓延していた台湾本島とは状況が大きく異なっていた。つつがむし病の症例は確認されていたものの、長らく、この島の住民の死亡原因は感冒（かぜ）が最も多かった。海に囲まれ、風によって隔絶された環境にあったため、あらゆる病原菌が入り込まなかったのである。

自然とともに暮らす人々

蘭嶼のゲートとなるのは台東豊年機場（空港）である。蘭嶼行きの飛行機は小型プロペラ機で、所要約 20 分。緑豊かな島影が見えると、機体は

徐々に降下し、海岸線沿いを低空飛行し始める。そして、大きく旋回したかと思うと、山の斜面に広がるイモ畑をかすめるようにして着陸する。

なお、台東の空港では、蘭嶼行きの案内放送にも注目したい。中国語(北京語)、台湾語(ホーロー語)、英語だけでなく、島の住人であるタオ族の言葉でも放送が入るのだ。しかも「飛行機」に相当する言葉はなんと、「ヒコーキ」と日本語の発音が借用されている。

機内から島の様子を眺めていると、思いのほか、雄大な景観が楽しめることに気づく。現在、海岸線に沿って、「環島公路」と呼ばれる一周38キロの道路が整備されている。これに従って進めば、島内すべての集落を訪問できるが、公共交通機関は郷公所(日本の村役場に相当)が運営するバスがあるものの、旅行者の移動を考慮したものではなく、交通は不便である。

島の人口は5千人ほどで、その9割近くを原住民族であるタオ(ヤミ)族が占めている。彼らは台湾で唯一の海洋民族であり、蘭嶼にだけ暮らす部族である。集落は椰油(ヤユー)、漁人(イラタイ)、紅頭(イモルツ)、朗島(イラライ)、東清(イリヌミルツ)、野銀(イワギヌ)の計6つがある。しかし、過疎化が進んでおり、就業機会の少ないこの島を離れていく若者は多く、青年人口の流出は深刻な社会問題となっている。なお、ここに記した現地語による集落名は、それぞれの集落によって発音が多少異なる。

島は日本統治時代、「紅頭嶼(こうとうしょ)」と呼ばれていた。そして、人々はこの島を「ポンソ(島)・ノ・タオ(人)」と呼んでいた。「蘭嶼」という呼称は、国際花卉展覧会でこの島の胡蝶蘭が高い評価を受けたことにちなんでいる。(1947年1月29日から、蘭嶼の名前が使用されている。)

日本統治時代、この島には多くの研究者が訪れていた。タオ族については、長らく「ヤミ族」という呼称が使用されてきたが、これは1897(明治



小さいながらも険しい景観を誇る島。玄関口となる空港。



蘭嶼の中で、最も伝統文化の景観を擁する野銀集落。



島内ではいたるところでヤギを見かける。

30)年に、文化人類学者・鳥居龍蔵(とりいりゆうぞう)によって名付けられたものであるとされる。「ヤミ」とは彼らの言語で「我々」を意味する「yaman」が転訛したもの、そして、「タオ」とは「人間」を意味する言葉である。

タオ族の文化景観を探る

タオ族は台湾の原住民族の中でも、とりわけ際立った個性を誇っている。そのいくつかの特色を以下に挙げてみたい。

まず、タオ族は頭目の存在を持たない。彼らは特定の権力を持つ首長を戴かず、決定事項は基本的に長老を中心とした合議制で決まる。集落内に起こった諸問題も、合議によって解決する。同時に、集落の構成員の平等は徹底されており、財産は自然神の下、共同で管理する。

さらに、年齢以外に身分の区別がない。食糧の分配なども基本的には均等に行ない、貧富の差もないというのが彼らの伝統だった。

また、集落によって状況は異なるが、住居は半地下式の伝統家屋である。老人は現在でも半裸でいることがあるが、こういった生活様式は中年以下の世代では廃れており、集落によっては絶えている。しかし、祭事の際には、やはり男子は正装であるふんどしを付け、女子は膝上まで草木の繊維で織った布をまとう。

家屋は「バウイ」と呼ばれる。最初に石垣を築いて長方形の窪地を作り、山と海を結ぶ線上に屋根が重なるように、高床式の家屋を建てる。これは台風の猛威から免れるための工夫であり、一見すると、屋根だけが地上に出ているような状態に見えるが、吹き付ける強風の直撃を避けるための知恵でもある。

家屋は居間、炊事場、作業場の三つに区分される。高さはわずか140センチ程度と低いため、屋内の移動はやや不便だが、内部は風通しがよく、夏でも暑さを感じない。なお、伝統家屋では電気

が通っていないことも多いが、最近は現代的な住宅と伝統家屋を併用しているケースがよく見られる。伝統家屋がよく残っているのは野銀(イワギヌ)集落だが、ここもまた、現代式の家屋を付近に設けている家庭が多くなっている。

なお、家屋については、何度か政府主導でコンクリート造りの簡易住宅を建て、そこに住むことを推奨したが、強風を避けることが考慮された半地下式の伝統家屋は快適なようで、なかなか定着しなかったという逸話も残っている。

さらに、「タガカル」と呼ばれる夕涼み台の存在も重要である。これは一種の「社交の場」である。暑さと強い陽差しを避け、作業場としても使用さ



バウイと呼ばれる伝統家屋。半地下式の高床式家屋である。現在は野銀と朗島に残るばかりとなっている。



奥に見えるのがタガカルと呼ばれる夕涼み台。社交の場としても機能している。



バウイの内部。天井はかなり低いが風通しは良好だ。

れる。伝統家屋に付随する形で設けられることが多いが、農作業などで疲れた時にも利用するため、島の随所で見ることができる。

死の霊「アニト」といかに付き合うか

タオ族はフィリピン北部のバタン諸島から渡ってきたとされる。台湾原住民族の他部族と同様、オーストロネシア系の言語を話す。台湾島の東南部に住むアミ族やプユマ族、パイワン族などとの間に言語の共通性は見られない。しかし、フィリピン北部のイバタン族とは通訳を要せずに会話ができる。イバタン族とは骨格的にも酷似しており、外見では区別ができないほどである。

彼らは他部族との接触をもたなかったこともあって、出草(首狩り)の風習は見られない。

信仰についても、独自のものを持っている。この島は外敵の侵攻や交流がなく、人々の暮らしは常に自然との調和の中にあった。したがって、自然との相互依存の発想が徹底している。何かものを生み出す際には大地の恵みに頼り、それを享受しながら暮らしていく。

人々は「アニト」と呼ばれる死の霊を極度に畏れる。それといかに向かい合っていくかがすなわち、人生であるという。

人間の死もまた、アニトが魂を連れ去ることに

よって起こる。タオ族には無数の禁忌が存在し、たとえば、遺体を葬る場所は遺族であっても訪れてはならない。また、人が死んだ場所を跨いではならない。さらに、タオ語には日本語に由来する「ヤマ」という言葉があるが、山岳部にはアニトが棲息しているので、近づいてはならないといったものがある。

余談ながら、祭事にはブタやヤギを供える。また、飲酒や喫煙の習慣がなかったというのも興味深い。ちなみに、これらは日本語の単語が彼らの言葉に入り込んでおり、「サケ」、「タバコ」(集落によっては「タマコ」と発音)と表現される。



トビウオ漁は男子だけで行なわれる。船は大きなものをチヌリクラン、小さなものをタタラという。白と赤、そして黒を用いた紋様が印象的だ。



戦後はキリスト教も大いに入り込んでいる。洞窟をそのまま利用した礼拝所。2004年撮影。



島内には大草原も存在する。

トビウオとイモが暮らしを支える

食文化も興味深い。タオ族の人々が主食とするのはイモ類で、多くの場合はタロイモである。湧水や溪流の周りには棚田が広がっており、ここが栽培地となる。なお、植えられるのはあくまでもイモ類であり、稲を植えることはない。

また、イモは必要な分だけを収穫し、茎は再び水田に挿しておく。土地はすべて集落の共同管理下であり、個人所有の概念はなかった。なお、イモ作りは女性の仕事であり、トビウオ漁が男性の仕事であるのと同様、男性がそれに触れることは許されない。

そして、彼らが最も重視するのはトビウオである。これは「イヴァンヴァン」と呼ばれ、天から授けられた恵みと考えられている。毎年3月から7月にかけてが漁期で、この間には多くの祭事が催される。

この時期は全島をあげて漁労に没頭し、男たちは共同生活を送る。漁は彼らにとって神聖な儀礼であり、暦もトビウオ漁や祭事を意識したタオ族独自のものが存在している。

トビウオ漁は夜に松明をもって魚を掬い取る漁法が守られている。獲れた魚は均等に分配され、天日干しした後、炉で燻された上で保存される。

漁は男だけで行ない、赤と白、そして黒を基調とする幾何学模様が印象的な「チヌリクラン」と呼ばれる船に乗って海に出る。日常的に用いられる2～3人乗りの船は「タタラ(tatala、拼板舟)」と呼び、6～10人乗りの大型船を「チヌリクラン(Chinurikuran)」と呼ぶ。このチヌリクランが進水する時には男性は銀の兜をかぶって正装し、盛大な儀式が行なわれる。

漁期の間、男たちは共同生活を送り、女たちもまた、共同生活を送りながら、漁から戻る男たちを待つ。トビウオの漁は彼らにとっては「儀礼」であり、同時に集団活動の基礎にもなっている。捕れたトビウオは家族の頭数に従って平等に分配される。

主食となるイモ類は、島内各所にある小川の上流か、「サワラン」と呼ばれる灌漑用水の周辺で栽培される。小規模ながらも棚田が見られるが、そこで栽培されるのはあくまでもイモであり、それ以外の作物を植えることはない。



主食となるのはイモ。複数の種類がある。栽培は女性の仕事とされている。



各家庭でトビウオの干物を見かけることが多い。



トビウオ漁に合わせて祭事が催される。

幻の蝶に出会う

蘭嶼はアジアにおける熱帯雨林の北限である。そのため、珍しい動植物が数多く棲息している。特に、蝶に関しては、台湾自体が世界的な注目を集めているが、蘭嶼だけで見られる、「コウトウキシタアゲハ」は、蝶の愛好家にとって憧れの存在である。

この蝶は台湾固有種とされ、中国語では「珠光鳳蝶」と表記される。羽を広げると12センチにもなる大型種である。前羽は黒色、後羽は金色をしており、後羽は太陽光線が当たる角度によってエメラルドグリーンやコバルトブルーへと変化する。

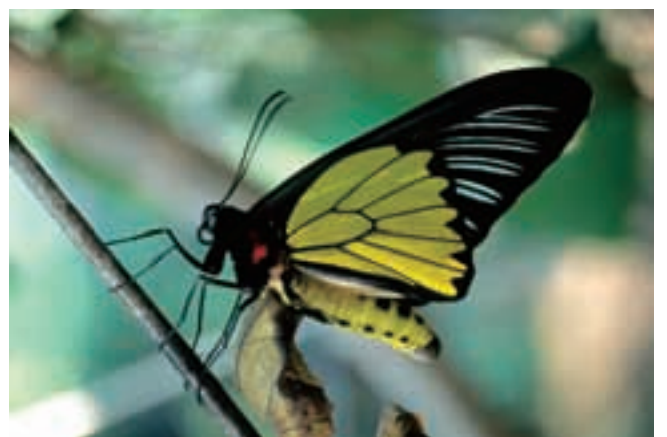
る。空を舞う姿は優美なかぎり、思わず息を呑む美しさだ。

コウトウキシタアゲハは海を跨ぎ、フィリピン北部や墾丁国家公園でも見かけることがあるとされるが、その数は少ない。タオ族の人々にとって、この蝶はアニトの生まれ変わりとされるため、タオ族の人々がこの蝶を捕獲することは少なかった。しかし、残念なことに、戦後に島に入り込んだ漢人系住民はこれを乱獲し、また、原生林の乱開発や植生の変化もあって絶滅の危機に瀕するようになった。現在は蘭嶼郷生態文化保育協会が保護育成に当たっており、この蝶が好む樹を植えた保護区が設けられている。

この蝶の最盛期は3月上旬とされている。ハイビスカスの蜜を吸うことが多いので、この時期に蘭嶼を訪れたら、ぜひともその姿に触れてみたい。

筆者はかつて、保育中のコウトウキシタアゲハを撮影する機会に恵まれた。現在、保護区は島内に数カ所設けられている。蝶が活動するのは早朝から昼前、そしてわずかながら、夕方とされる。

筆者が訪れた際、保護区には数頭の珠光鳳蝶が舞っていた。その様子を眺めていると、枝にさなぎがへばりつき、今にも羽化しようとしているのを見つけた。ゆっくりと姿を見せる成虫。徐々にはっきりと鮮やかな黄色と黒の紋様が目に飛び込んできた。この世に誕生したばかりのコウトウキ



羽化するコウトウキシタアゲハ。コウトウとは島の旧名である紅頭嶼に由来する。

シタアゲハ。そのあまりの美しさに、見とれてしまったのは言うまでもない。

蘭嶼を取り巻く現況と今後

外界との接触がなく、独自の文化を育んできたタオ族の人々だが、戦後を迎えると、漢人系住民と接触する機会が増え、状況は大きく変わった。

人々は現代文化との接触によって変容を強いられることとなった。日本統治時代は伝統文化の保護を名目に、自由な往来は禁止されていた。先にも述べたように、これは、この島の住民が外界と隔絶されており、病原菌に対する免疫を持たなかったことが理由とされる。実際に、決して遠くはない緑島（旧称・火烧島）は漢人系住民が持ち込んだ病原菌によって、先住の人々は絶えてしまったとされる。しかし、戦後に台湾の統治者となった中華民国政府はこういった状況を重視しなかった。

長らく自給自足の暮らしを貫いていた人々は、こうして台湾本土の経済圏に組み込まれていった。特に、1982年に低レベル核廃棄物貯蔵施設が設けられると、その補助金によって生活環境やインフラの整備が進み、ここでも人々の暮らしは大きな影響を受けた。

現在、産業のないこの島では「観光」に大きな期待が寄せられている。かつては旅行者が食料やミネラルウォーターを入手することすら困難だったが、2014年にはコンビニエンスストアがオープンし、状況は一変した。そして、空港の拡張工事や電力の安定供給なども実現し、便利さは以前と比較にならないものとなっている。

繰り返しになるが、自然と共生してきたタオ族の文化は激変に晒されている。数年前からは文化保護の発想が入り込み、現在は記録と研究が熱心に続けられている。今後の動きに注目したいところである。



タオ族の男性の正装はふんどし。真っ黒に日焼けした身体は細身だが、“海の男”であることを感じさせてくれる。



「トビウオ定食」。食文化についても、観光地化の波が到来している。現在、島には何軒かのレストランがあり、旅行者の需要に応えている。



島の外周を走る環島公路の様子。



自給自足を基盤とした暮らしは年々変化している。過疎化も深刻な事態となっている。



日本統治時代に撮影されたタオ族の人々（『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』より転載）。



日本統治時代は紅頭嶼と呼ばれた。『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』より転載。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部教育学科卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。地理・歴史、原住民の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。また、これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ35冊を数える。著書に『台湾に生きている日本人』（祥伝社）、『古写真が語る台湾日本統治時代の50年』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がけるほか、台北生活情報誌『悠遊台湾』を毎年刊行。最新刊は『台湾探見 Discover Taiwan～ちょっぴりディープに台湾体験』（片倉真理著・ウェッジ）。『観光コースでない台湾・南部編』（高文研）を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>